

四人 東京都

自分の思ったことを自由闊達に

「この五月、六月、七月と、心身の衰弱状態が続き、『四人』九四号のことが気になりながらも、手を付ける気力もなかったが、ある同人から『なんばしよつとか、怠慢は悪徳バイ』と発破をかけられて、やっとここまでたどりついた」

二〇一四年（平成二六年）一月二二日発行九四号の編集後記にこう記して、成清良孝さんが編集担当を降りられた。やむなく私が編集を引き受けることになった。

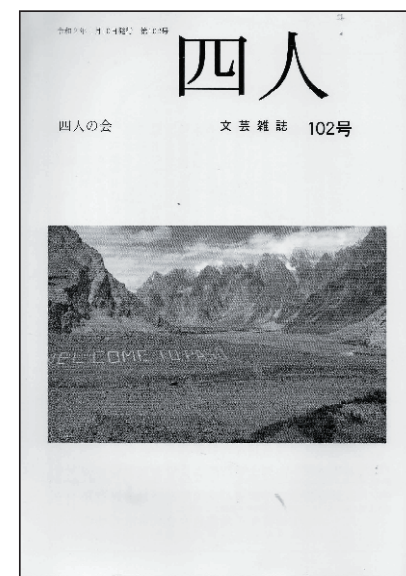
『四人』の創刊は、一九六〇年。『隊商』の残留組——小松郁子、星川道之助、峯島正行氏、辻千鶴氏の四人が始めた。四人が始めたので『四人』と名付けた。

それから三七年後の一九九七年、長く編集を続けてきた永松習次郎氏が逝去され、六一号から九四号までの一七年間、成清良孝氏が編集を担当された。その成清良孝氏も世を去られた。

ここで少しばかり、『隊商』について説明しておきたい。『隊商』は一九五〇年（昭和二五年）七月に創刊し、一九五九年（昭和三四）七月に最終号を出している。同

人には、火野葦平や長谷健がいて、編集の中心は永松習次郎というように、九州出身者が多いのが目立つ。『隊商』や『四人』の編集発行を長く務めた永松習次郎や、長谷健、成清良孝などは、現在の福岡教育大学の前身、福岡師範学校、福岡学芸大学を卒業、上京して公立の小、中、高校の教師の職に就いた。

『隊商』は、東京で出版されたが、実は九州で長く文芸運動の中心的役割を果たしてきた文芸誌『九州文学』に繋がる同人が多かった。同誌周辺で新たな雑誌の創刊が協議された時、火野葦平、長谷健の親身な協力を得て『隊商』は誕生したのである。『隊商』二三号（昭和三三年三月）は、長谷健追悼号であるが、その編集後記には、「火野氏をおやじに、長谷氏をおふくろのように考えていた」と記されている。



昨今は、社会の老齢化が進み、後継者不在による廃業が増えてきた。出版の世界については、さらに紙・活字離れという現象も悪い要因として働いた。

同人雑誌全盛の時代には、多くの逸材が同人雑誌から輩出した。『四人』についても、その六〇年の長い歴史の中には、有名な文学賞を受賞した方や候補になられた同人が多く加わっていた。今は、昔と違って同人雑誌からばかりではなく、いろいろなきっかけで職業作家が生まれる世の中になった。

私が編集に携わるようになってからは、それまでの同人誌出身の著名作家の系譜につながる方々ばかりではなく、働き盛りの時には適わなかったが、退職後に書き始めたという同人も増えてきた。

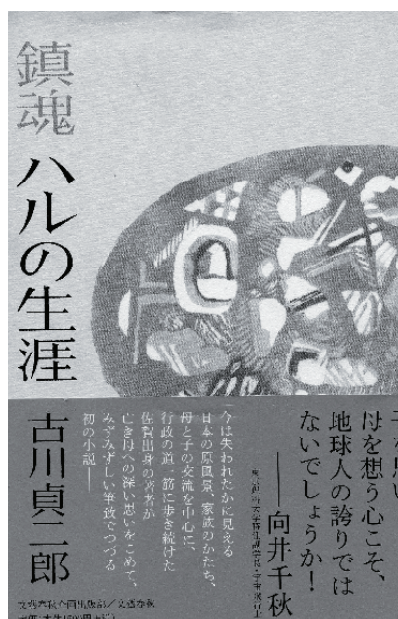
最近、嬉しいニュースがあった。『四人』に「鎮魂ハルの生涯」を五年間連載してきた古川貞二郎氏が自費で単行本を出したところ、NHKや新聞で評判になって、意外にも自費出版では珍しい、即、増刷という現象が起きている。一つの例を挙げると、読売新聞一月二日朝刊は、「胸迫るほど母思いに満ちた自伝的小説が出版されました。（官

僚のトップ）内閣官房副長官を八年七か月も務めた古川貞二郎さんの『鎮魂ハルの生涯』です」と写真入りで書評を出した。

ゴーストライターが書いた政治家や官僚の自叙伝は多いが、忙しいスケジュールの間を縫って、こつこつと自身身の指と筆で書き進めて行った自伝的小説は数少ないだろうと思う。

誰にも干渉されずに、自分の思ったことが自由闊達に書ける。こういうことが同人雑誌のよいところだろう。本誌は、編集者が作者の作品に筆を入れない、校正は作者本人が責任をもって行う、という編集方針をとっている。他者が筆を入れることによって作者の意図を損なうことを恐れるからである。

（山本悦夫／『四人』編集発行人）



「四人の会」

〒一〇三・〇〇〇四 東京都中央区東日本橋一・六・五
佐藤ビル1階 インターナショナルセイア内

090・2203・2434